

視点(1630)

20世紀型経済の成長と終焉のメカニズム!!

(流通経済編)

20世紀経済は17世紀から18世紀に起こった産業革命(大量生産・大量販売・大量消費)による経済と生活の発展システムでした。しかし、今、日本を中心とした先進国は20世紀型経済の発展指数である「国内総生産」(GDP)が超低成長あるいはマイナス成長になり20世紀型経済の終焉の段階になりつつあります。

経済の成長は「労働人口増」×「1人当たり労働人口の生産性の向上」の伝統的な算式で表すことができますが、私は生産側ではなく消費側から見ると20世紀型経済の成長(GDPの成長)と終焉(GDPの停滞)は次の通りと考えています(六車流：マーケティング論)。

(1) メカニズムの基本型

20世紀型経済を消費構造から見ると次の3つの要因から成り立っています。

①消費人口 (マーケットの規模の大小の面からの考察)

- ・生産人口(15歳以上64歳以下の生産年齢人口)による生産者＝消費者の消費人口
- ・総人口(すべての年齢層で生産者でなくても良い)による消費者の消費人口

②所得のレベル(広義のモノを買う1人当たりの金額の高い低いの面からの考察)

- ・2万ドル未満の十分なる広義のモノを買う力を持っていない所得レベル
- ・2万ドル以上の基本的には欲しいものが買える力を持っている所得レベル

③消費構造(モダン消費としての貧しさからモノを通じて豊かになる意欲の高い低いの面からの考察)

- ・モダン消費の層で、モノを買い、モノを消費し、モノを使用し、モノを所有することの連続性に幸せを感じる消費者
- ・ポストモダン消費層で、モノを消費することには興味が起こらないモノ離れた層

(2) 日本、アメリカ、韓国、中国での20世紀型経済の成長と終焉のメカニズム

	国 別			
	日 本	ア メ リ カ	韓 国	中 国
消費人口	・1998年に生産人口減少始まる ・2005年に総人口減少始まる (少し波があるが適切な人口増)	・現在も生産人口増加中 ・現在も総人口増加中 (移民等による社会増の自然増)	・2015年頃に生産人口減少始まる(?) ・2020年頃に総人口減少始まる(?) (急激な人口増による高齢化)	・2015年頃に生産人口減少始まる(?) ・2025年頃に総人口減少始まる (一人っ子政策による高齢化)
所得レベル	・1980年に1人当たり2万ドルになった (比較的所得格差と地域格差がないため一挙に進む)	・1960年頃に1人当たり2万ドルになった (所得格差と地域格差があるため長期にわたって進む)	・2000年頃に1人当たり2万ドルになった (比較的所得格差と地域格差がないため一挙に進む)	・2030年頃に1人当たり2万ドルになる(?) (所得格差と地域格差があるため長期にわたって進む)
消費構造	・1988年にモダン消費は終焉 (現在は、ポストモダン消費の真っ直中)	・1971年にモダン消費は終焉 (現在はポストモダン消費50%、モダン消費50%の半々の消費)	・2005年にモダン消費は終焉 (現在はポストモダン消費に突入)	・2030年にモダン消費は終焉 (現在はモダン消費の真っ直中)

(3) 総評

- ①日本は20世紀型経済が終焉して、典型的な21世紀型経済に突入している(今後は21世紀型商業のモデルとなる経済国家)
- ②アメリカは長期の移民(アフリカ系アメリカ人、アジア人、ヒスパニック等)による社会増による自然増が多く、白人を中心とした中間所得層と富裕層のポストモダン消費とこれから豊かになる層の半々のマーケットとなっている。
- ③韓国は、まさにモダン消費からポストモダンとなった直後であることと、近未来は生産人口・総人口が急激に高齢化する。
- ④中国はまさにモダン消費真っ直中であるが、2015～2025年にかけてモダン消費が終焉する前に高齢化が起こる。

(株)ダイナミックマーケティング社⁺

代 表 六 車 秀 之